

お名前	性別	終戦時の年齢	現住所
あさみ えいき 浅見 英紀	男性	5歳	富岡東部

「何一つ語らず逝った父 高女引率教師の苦悩」

昭和20年（1945年）8月7日、豊川海軍工廠の空襲の時、父は37歳でした。私は昭和15年（1940年）1月1日生まれで、当時5歳と8ヶ月でした。すべておぼろげなる記憶ですが、当時を思い出してみます。

その日は、朝から快晴のうだるような猛暑が襲ってきていました。朝食を終えてしばらくすると、家から北西の方角（吉祥山と本宮山の間）から花火が上がるような連続音と黒煙がもくもくと上がりだしました。母と畑に出て、恐ろしげにその有様を眺めていました。やがて暑い暑い夏の日も落ち、真っ赤な夕焼けが広がりましたが、その中に黒い煙だけがもうもうと立ち込めていました。それを眺めながら、母がぼつりと「お父さんは帰って来ないかも知れない。」とつぶやいた言葉だけ記憶に残っています。

「帰ってこない」という言葉が、「今晚」なのか「永久」なのかは知る由もありませんでした。一日経ち、二日経ち、三日経っても父は帰って来ませんでした。あの混乱の中、父の無事を連絡してくれた人がいたとは到底思えません。母は悶々とした日を送っていたのだらうと思われまます。

それから一週間ほど経ったある日の薄暗くなった夕方、真っ黒にすすけた顔で憔悴しきった父がひょっこり帰ってきました。父は「やあ〜。」と言ったような気がするのですが、何を言ったのかは記憶にありません。

その夜のこと、どこかのおじさんが尋ねてきて、書類の様なものを置いていきました。その人が帰ったすぐ後、父は「何を今さら・・・」とつぶやいたのを聞いた覚えがあります。

それは「召集令状」でした。その晩は、8月14日ではなかったろうかと思っています。空襲を受けた8月7日から行方の分からない方々を探し、7日7晩早朝から深夜まで探し続けていたのですから。

新城高校の佐藤先生が探してくださった「婦人倶楽部」（昭和28年10月号）「豊川海軍工廠の姫百合～乙女部隊死の記録」の中に、父は生徒さんを一緒に引



特集記事「豊川海軍工廠の姫百合」の挿し絵より

率していた弱冠^{じやつかん}23歳の鈴木としこ先生とともに、丸一週間鬼火の燃える廠内で暮らし、不明者を探し続けたとあります。鈴木先生と父はご父兄の一部の方々から猛烈な批判を受けました。

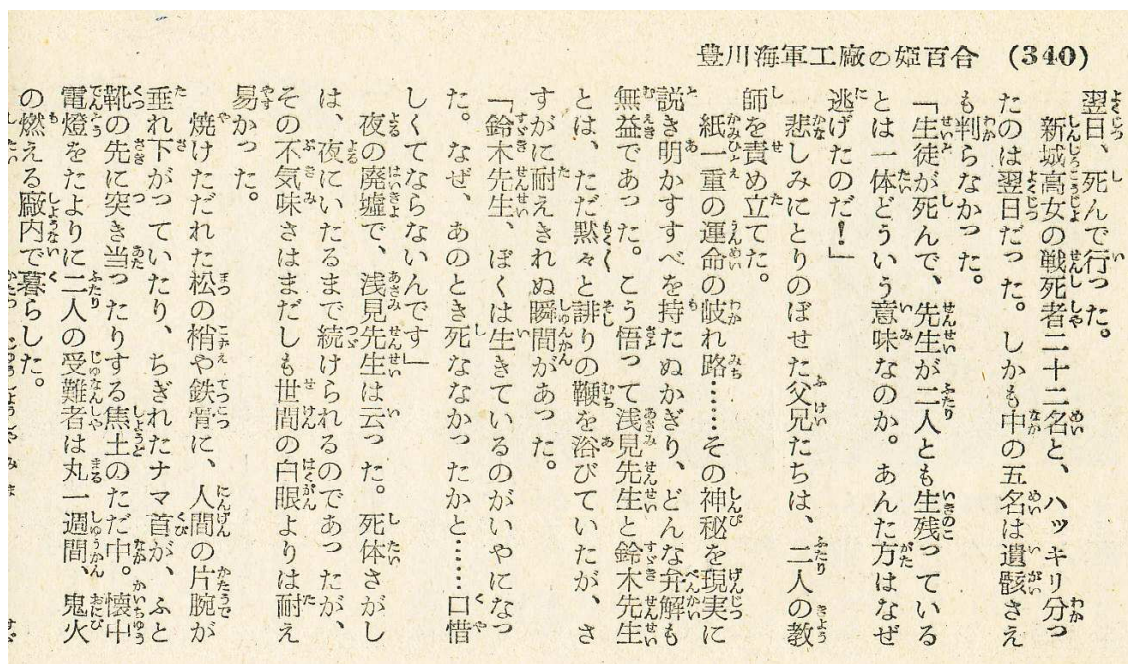
「生徒が死んで、先生が二人とも生き残っているとは一体どういう意味なのか。あんた方はなぜ逃げたのだ。」と……。父は、

「鈴木先生、ぼくは生きているのがいやになった。なぜあの時死ななかつたかと……口惜しくてならないんです。」と言ったと書かれています。このような批判は、生徒さんの中にもあつたのではないかと思われます。後々^{けいけんたん}経験談を書かれた生徒さんの文章に、短く且つ冷たく「教師には死者はなかつた。」と書かれた一行があつたからです。父はこの惨状^{さんじょう}を家族にはもちろん、母にも一度として話したことはありませんでした。ひたすら自分の胸に秘めて、耐え忍んだのであろうと想像^{そうぞう}されます。

今思えば、もっと何かを聞いておけばよかつたのにと**思うばかり**です。このような機会にいろいろなお話が出来たであらうと悔やまれるばかりです。

昨年の秋、新城高校の文化祭のためにたくさん資料を揃えて下さった佐藤先生、いろいろな機会に情報を下さった安形茂樹さん、父の人となり**を熱く語って**下さった新城高女32回生の皆様に心から御礼を申し上げます。

平成28年7月23日 浅見 英紀



昭和28年発刊 婦人倶楽部特集記事 「豊川海軍工廠の姫百合」より抜粋